

---

# 居場所探しの旅 2

ゴンギツネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

居場所探しの旅2

### 【Nコード】

N8757Z

### 【作者名】

ゴンギツネ

### 【あらすじ】

『生活系』と『防御系』の能力しか無いこの世界に、俺  
ト「レイニーは、『攻撃系』の能力を持って生まれきた。  
しかし、そんな俺に好機が訪れる。それは、俺の能力が生かせる  
異世界 レオスへの移住だった。

## 異世界と過去について

俺は、いつも避けられていた。あの授業から

\*\*\*

「今日、能力を調べるぞ」

皆、ワクワクしていた。例に漏れず、俺も。

「説明するぞー。まず、言われるのが能力名で、能力カードってのが、能力が示されているカードな。ちなみに、俺のは『結界』で、半径六メートルに何も寄せ付けないんだ」

じれったかった。五分くらい話を聞くと、体育館に案内された。

「一番前の人から。ローラさん。『鉄壁』ですね。はい、能力カードです」

そして、俺の番がきた。

「はい、五六番目の方　ロトさん」

「はい！」

「『強化』ですね。え？　強化？」

そこで、先生が呼ばれた。そこからは、途切れ途切れにしか分からなかった。

「これは……」

「でも……」

「しかし……」

「だからといって……」

「もしかしたら……」

「仕方ないが……」

俺は、隔離された。なんでも、「攻撃系の能力は聞いたことがないから」らしい。

\*\*\*

その後は、地獄だった。防御系や、生活系の能力ばかり説明され、攻撃用の能力については、何も教えてもらえなかった。そして、軽蔑の視線を向けられる。……幸いにも、攻撃系の能力が怖いのか、暴力は振るわれなかったが。

\*\*\*

「ここは、どこだ？」

気がつけば、見たことのない場所に居た。……捨てられても、不思議ではないな。俺は、考えたが、すぐにその考えを捨てた。

前方から、大きな殺気。

現れたのは、大きな虎だった。

「ははは、嘘だろう？」

俺は、乾いた笑しか浮かべることしか出来なかった。

俺は、自作の武器を持って、虎に向かって走った。

## 精霊を吸収することの便利さについて

「っ!？」

虎が、襲いかかってきた。右に飛んで、辛うじて避ける。しかし、転んでしまったのが仇となった。そこに、また虎が襲いかかる。

「身体能力を強化」

激しい痛み。しかし、これで確実に倒せるはずだ！ 右の肘で、虎の喉を叩く。そして、喉を抑えつけた。そのまま、右足を虎の前足に引っかけ。足払いに似た感じになり、虎は前のめりになる。肘を当てている右手の甲で、虎の後頭部の少し下を叩く。バックハンドブローが、綺麗に首筋に決まる。筋肉がちぎれる音が、聞こえた。

右手の犠牲に関わらず、虎はまだ生きていた。

「トドメっ!」

最後に、鼻を思いつき蹴った。鈍い音がして、虎は絶命した。

「強化……解除」

そういうと、俺は眠り始めた。

\*\*\*

ロトが寝る。危険がいっぱいあるこの地で寝るのは自殺行為だが、森の主である『テイオス』を倒したことにより、ロトは森の主へ成り上がっていた。お陰で、何にも襲われることなく、眠っていたのだった。

\*\*\*

起きると、目の前に熊がいた。急いで戦闘態勢を取る。

「落ち着いて下さい！ 我々は貴方に挨拶をしに来ました」

熊は、慌てて用件を言う。それはそうだろう。熊も、死にたくはないのだから。

「……なんで俺はお前と話せるんだ？」

「それは、おそらく、前王　　ティオスの精霊が、貴方に吸収されたからでしょう」

「吸収？　精霊？　詳しく話せ」

ロトが、低い声を発する。

「は、はい。精霊が、各生物　　微生物にすら宿っているのは、存知ですよな？」

熊は、どもりつつも話した。

「いや、今知った」

「知らないのですか？　……まあ、その精霊が、　憑く者によって強さが違うのですが、貴方に吸収　　憑いたのでしょ」

途中で驚いた声を変えたのは、ロトが睨んだからだろう。

それにしても、とロトは考えた。信じられないが、俺は違う世界に来たのか。誰が、いったい何の意図があつて

「で？　なぜ俺に話した」

「それは、貴方がこの森の王に成ったので、挨拶をしにきました」

「そうか。ご苦労様。今度も、呼ぶから」

「ありがとうございます」

熊は帰っていった。

ロトは考えた。これは、とんでもない好機なのではないかと。

「治療能力を強化」

傷口が逆再生する。ぐちゅぐちゅ、と生々しい音が、静かな森に響いた。

町へ向かう道について（前書き）

外道？ ですかね……。

## 町へ向かう道について

この地に移住してから2カ月はただただだろうか。正確な日数はよく覚えていないが……。しかし、あまり襲われることがなかったから、体が一訛なまっている。たまに人間だから弱いと踏んで、自信満々で襲ってくる馬鹿もいたが、それも数度で終わった。

\*\*\*

彼は、落ち葉が舞っている赤い森の地面をゆっくり踏んでいた。無音の森で、落ち葉を踏む音が妙に存在感がある。そして、それが心地よく感じるのは錯覚ではないのだろうしかし、無音の森では、少々寂しげもある。矛盾しているが、確かにその通りなのだ。

しかし、その静寂はくぐもった低い声によってすぐに破られた。耳触りが悪くなるような声。彼は、不快な声の音源を確かめるべく、その方向へ向かっていった。

「助けてくれっ！」

商人らしき者が狼に襲われている。

彼が行くと、商人らしき者は声を発した。

「煩い。黙れ。一塵ごみは言葉を発するな」

自分の言葉が通じるのかは分からなかったが、杞憂だった。どうやら、通じるようだ。

「なっ！？ 私が誰だかわかっているのかっ！？ 貴族だぞ！？」  
貴族だったのか……。人はみかけによらないものだ。

「しるかボケ。ここで助けなくてもお前は権力を振るえないだろ？ 立場を考えろ。一屑くずが」

すると、貴族？ の男性は絶句した。

「なっ！？ た、頼む……。金は幾らでもやる……。だから？」

「金はどこだ？」

「む、向こうの馬車だ」

「案内しろ」

そう言うのと、男性は安心したようだった。

「だったら、この魔物を」

「ああ。『邪魔だ。退け』」

ロトは、北大陸言語を使わず、言葉を発した。

「それは、魔物言語か？」

「しらん。さっさとしろ」

ロトは、ぶっきらぼうに答える。

「あ、ああ。こつちだ」

男に案内させると、確かに馬車いっぱい宝石などが積んであった。

「そうか。では、遠慮なくいただく」

ロトは、そういうと、馬車を引いていた従者を引きずり降ろした。

「全部とは言っていないぞ？」

「だが、お前は『幾らでも』と言ったはずだ。お前は、約束を破るのか？」

「ぐ……だが……」

「そうか。仕方がない」

そう言うのと、貴族の男は、目に輝きを取り戻した。

「じゃあ？」

「ああ。じゃあ死ねよ」

そういうと、貴族の心臓の活動を『強化』して、心臓麻痺を発生させた。

貴族が、唾液を垂らして無様に倒れる。

「ひっ……」

ロトが従者をギロリと睨んだ為か、従者は悲鳴を上げた。

「どうか命だけは……」

「うん。仕方ないなあ」

「ありがとうございます。ありがとうございます……」

「やっぱごめん。どうせ、このことを話すだろ？ だから、殺す」

「っ！？ は、話さない！ だから。と、やめ……？」

「じゃあ、また来せ」

「ぐっ！？ う……！？」

バタリ、と。従者が倒れた。土埃が舞う。

宝物を前王 ティオスの毛皮に包む。

……かなり重い。

「身体能力を強化」

ぱりぱりっ、と。痛みが体を襲う。

……しかし。これで早く動ける。

「体の頑丈さを強化」

しないと、体の繊維が切れてしまう。……前に、これなしでやっ

たら一動だけで体が切れた。

ロトは、馬車が向いていた方向をもとに、町へ向かったのだった。

## 馬鹿な門番のお陰でスルーできた検問について

3時間は走っただろうか。街のシルエットが見えた。立ち止まって、息切れを直す。急に立ち止まると、心臓麻痺を起こしやすいため、少し前で止まった。

「次の人！」

門番が強く言った。

「はい」

緊張感のない声でロトが答えた。

「名前は？」

「ロトです」

「身分を証明できるものは？」

「途中で、盗賊に身ぐるみを剥がされてしまいました。まるつきり嘘である。むしろ、身ぐるみを剥いだ立場だ。」

しかし、門番は同情したのか、「辛いことを聞いて済まなかったな……」と言った。

馬鹿だこいつ……。ロトは思った。手に持っている虎の風呂敷が見えなかったのか。

「じゃあ、金はあるか？」

「ええ」

ロトは、後ろの人から盗った小銭を出す。

「ありがとな。頑張れよ」

そもそも、自称身ぐるみを剥がされた奴に、金があるって聞くか？ しかも、身ぐるみを剥がされたのに金持ってるってありえないだろ。と、ロトは考えたが、親切な言動には、文句は言わなかった。

\*\*\*

美しいとも、綺麗とも言える風景が、門を通ったら見えた。  
どこに泊まるうか……。

理解力を『強化』して、動物（主には脅した熊）に人間の情報を聞いた。なんでも、動物には独自のネットワークがあって、森に帰ってきた動物が、他の動物に情報を教えるのだという。

「宿にでも泊まるか……」

ぼそりと呟いた声は、誰に聞こえるでもなく風に乗って流れていった。

\*\*\*

「はいよ。一泊4000カブ（1カブ＝1円）ね」

「今日はお願ひします」

と言つて、盗った金を渡した。

普通に去ろうとしたが、ロトの目に、信じられないものが写った。  
物理法則を無視したもの

「おば……お姉さん、それはなんですか？」

それとは、おばさんが出した魔方陣らしきもの六芒星ろくぼうせいだった。

「え？ 収納の魔方陣だけ……。これがどうかしたのかい？」

「い、いや、そんなもの見たことがなくてね……」

「おやまあ、見たことがない？」

「なにかしら記憶が抜けているものがあるような気がしたんですが……魔法ですかね？」

「記憶が抜ける？ 記憶喪失かい？」

「いや、その部分だけすっぱり抜けているんだ」

「へ……。不思議なことがあるものだねえ……。おっと、不謹慎だったかな」

「いえ、気にしていませんから、お気になさらずに……」

さつきは、取り乱してしまつたが、今度からは気を付けなければ……。この町の人が馬鹿ばかりとは限らないから。しかし、とロト

は思った。

魔法……。なんとも魅力的な力だ。欲しい。その力が

\*\*\*

《魔術師ギルド・入団無料です。魔術、教えます》

何を書いてあるか分からない看板。

「おい……」

野菜を売っている親父に聞く。

「なんだ？」

「その看板に書いてある文字はなんと読むんだ」

「《魔術師ギルド・入団無料です。魔術、教えます》だよ」

「ありがとう。あ、野菜安くしておいてくれよ」

「へへ……。毎度」

一回目だがな、と心のなかで呟く口ト。

「それにしても、文字が読めないのか？」

まずい、なにか不自然だったか。

急いで、10000カプを渡す。

「秘密だ」

「そうか。すまなかった」

しかし、杖を持った人が行き来しているから、もしかしたらと思  
って聞いたが……。

明日は、あそこへ行こうと、明日の方針を口トは決めたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8757z/>

---

居場所探しの旅 2

2012年1月6日12時45分発行